

研究ノート

福祉学科の 2 年生における進路決定や就職に関する意識調査 A Survey on Career Decisions and Job Hunting in the Second-Year Students of the Social Care and Welfare Department

関 好博 吉牟田 裕

SEKI Yoshihiro YOSHIMUTA Yutaka

【要約】福祉学科 2 年生に介護福祉士としての就職に関する意識調査を試みたところ、就職先への期待や求めているもの、就職に際して不安に感じていること、進路決定に影響している要素、職場選びで特に重視するもの、事業種別での選択理由の傾向が判明した。

キーワード：就職 意識調査 介護福祉士

1 はじめに

毎年、4 月、5 月になると、2 年生の本格的な就職活動を控えて、複数の介護保険事業所が学科を来訪され、学生の就職動向や求人状況について説明を求められることがある。その中で繰り返される質問が「学生はどういったところに就職したがつているのか」といった、就職先を選ぶ上での条件や価値観などに関するものである。

正直なところ、学科においても担任による個別面談で個々の学生の意向を把握するよう努めてはいたが、明確な数値をもって根拠となすような確認まではしたことがなかった。「だいたいこんな傾向があるようです」といった、応対に出た教員の主観的な説明に終始していた状況であったことから、具体的に意識調査をし、今後の就職指導に反映させようと考えた次第である。

そのきっかけとなったのが、県内で特別養護老人ホーム（以下、特養）や保育園といった民間福祉施設を運営する者で構成している、富山県社会福祉法人経営者協議会の青年部である富山県青年経営者協議会から、学科への学生の就職状況に関わる研修の講師依頼である。まさに、学生の進路決定や就職に関する意識についてとのテーマであったことから、福祉学科の 2 年生全員の調査をおこなった。

今回の調査は、福祉学科 20 期生 33 名のうち、介護福祉士の資格を取得しない 1 名を除いた全員を対象とし、社会人学生である委託訓練生 4 名にも一律に調査をおこなっている。次年度にもう一度同じ調査を新 2 年生におこない、もって福祉学科 2 年生の進路決定や就職に関する意識の傾向を明らかにする研究につなげる予定でいる。なお、32 名の男女比は 12 対 20（3 対 5）となっている。

2 アンケート調査の結果について

(1) 調査内容と実施について

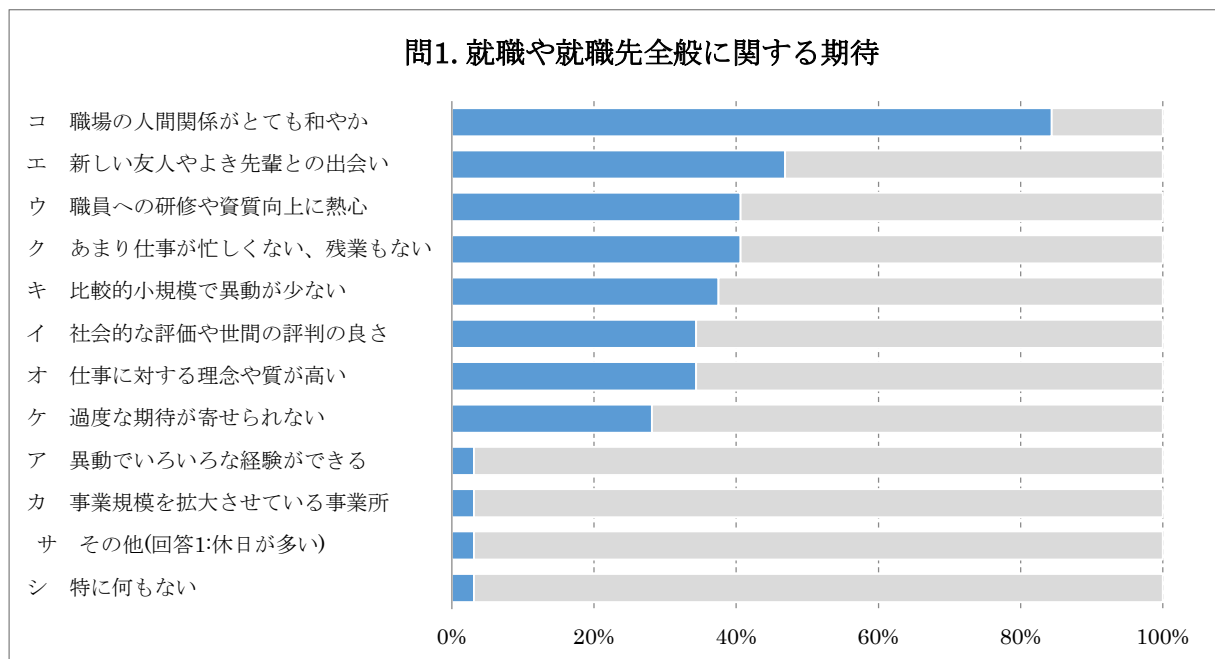
設問は以下の 6 つである。第 1 問「就職や就職先全般に関して期待、あるいは求めているか」、第 2 問「就職に際して、不安に感じているもの」、第 3 問「進路決定に影響している要素」、第 4 問「職場選びで特に重視するもの」、第 5 問「就職を考えるその事業種別を選んだ理由、もしくは他を選ばなかった理由」(以上、選択肢で回答)、第 6 問「その他、就職後にチャレンジしたいことやサポートしてほしいこと、さらには就職先に求めたいことや訴えたいことなど(自由記述)」である。

設問ならびに選択肢については、県内の特養 3 箇所から管理職 3 名(施設長、副施設長、事務長)に協力をいただき、協議の上、確定させたものである。

アンケート調査は、28 年度前期の最後のホームルームである 7 月 25 日におこない、その場で回収した。

(2) 調査結果について

①就職先への期待



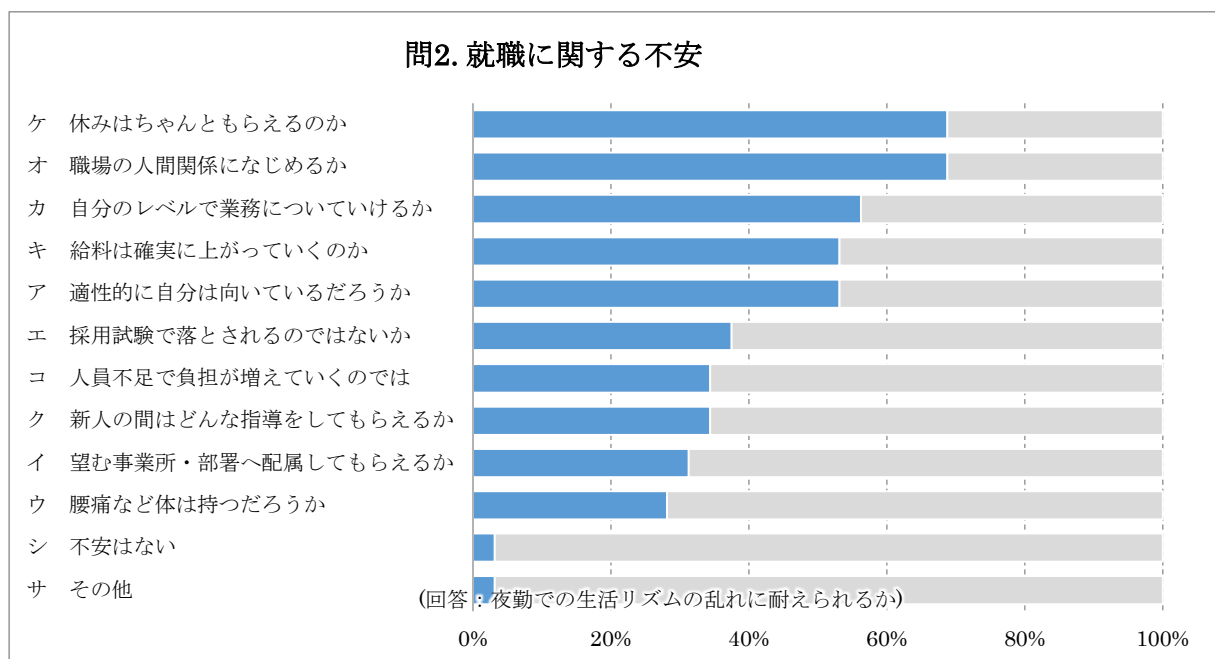
介護職員の離職理由の第 1 位に「職場の人間関係」を挙げる外部の調査結果もこれまでに存在しているが、福祉学科の学生においても「職場の人間関係がとても和やか」であることを求める傾向が顕著である点が興味深い。学生は給料のみにて職場を選ぶわけではなく、人間関係など職場環境を重視していることが見て取れる。同時に、学生にとって仕事が続けられるかは人間関係次第とも言え、職場に良好な人間関係を構築できるかとの心配を抱えていることが伺える。

次いで「新しい友人やよき先輩との出会い」が挙げられている。これも、見方によっては人間関係に対するニーズとも言えるものである。同期の仲間や理解のある先輩らに相談したり励ましあったりできることが、学生にとって仕事を続けられるための条件となっているこ

とがわかる。第 3 位には同率で「職員への研修や資質向上に熱心」「あまり仕事が忙しくない、残業もない」が並ぶ。ただし、これらは相反するところがあり、研修や施設内勉強会は自分の休日と重なる場合や勤務時間外になることも想定されるため、実際に働き出したあとで戸惑いかねない。

そして、選択肢のアとキの比較、カとキの比較から、小規模な法人で、かつ異動のない事業所に対するニーズがあることがわかる。学科では、卒業後はまず大規模施設でレベルアップを図るよう勧めていること、複数の事業所を抱える法人で異動可能なほうが長く続けやすいことなどを伝えているが、学生は将来のことよりも目先の働きやすさに眼が行っている様子がわかる。

②就職に際しての不安



「休みはちゃんともらえるのか」と同率で「職場の人間関係になじめるか」が第 1 位となっている。設問 1 と並んで、人間関係に敏感になっている実態が見て取れる。そして「自分のレベルで業務についていけるか」や「適性的に自分は向いているだろうか」といった、自分の自信のなさや進路への迷いがこの時点でもまだあることから、介護業務に就くことへの不安が大きいことがわかる。第 2 志望合格や迷いながらも進学してきた者がいることも、その背景として考えられる。

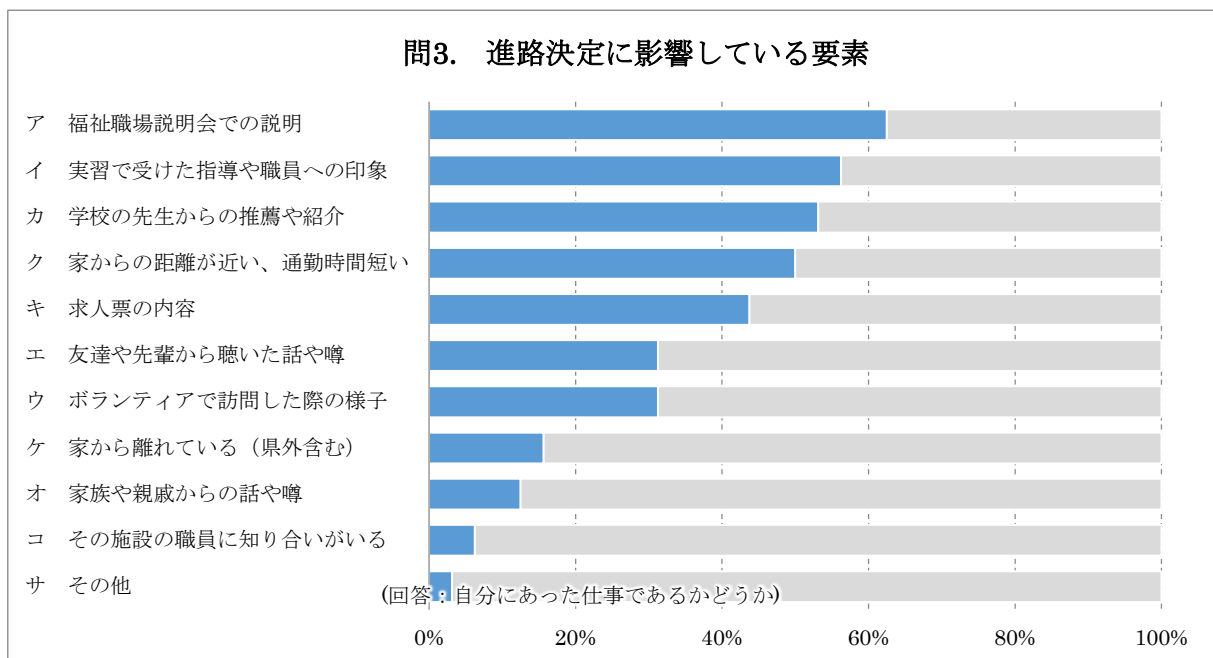
そのほか「給料は確実に上がっていくのか」「人員不足で負担が増えていくのでは」という、業界全体への不安も見逃せない結果となった。

意外だったのが、これだけ売り手市場と言われる中であっても「採用試験で落とされるのではないかと」の自己肯定感の低さが、少なからず学生に見られる点である。これには、まだ 2 年前期の終了時点という調査時期も関係していると考えられる。

③進路決定に影響している要素

僅差で並んだが、上から「福祉職場説明会での説明」「実習で受けた指導や職員への印象」「学校の先生からの推薦や紹介」「家からの距離が近い、通勤時間短い」「求人票の内容」の順である。学科では、2年生の8月ないし9月に訪れる就職活動のピークに向けて、それまでに実習で3箇所しか訪問していないことから、少しでも関心のある事業所へボランティアに出向いて見聞きすることを奨励しているが、「ボランティアで訪問した際の様子」が上位にないことから、そうまでして就職先を選ぼうとする学生が多くない現実を再認識させるものとなっている。

以前から教員の間では指摘されてきた「実習時の印象」は高いが、それにもまして福祉職場説明会が決め手になっている事実が明らかになった。学科では、まず求人票を見て福祉職場説明会で回る事業所を決め、当日は3箇所以上の事業所ブースを回り、比較検討のうえ就職先を考えるよう指導をおこなっている。そこには教員に相談に来る学生もあり、そういった実態を反映した結果と言える。



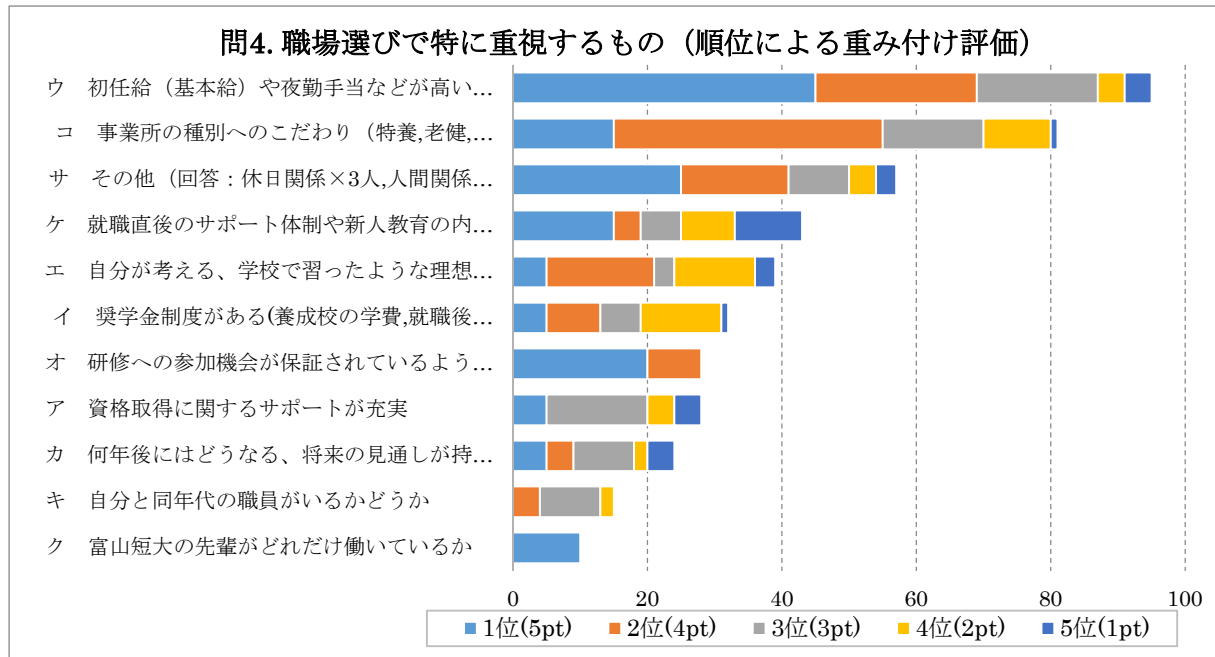
④職場選びで特に重視するもの

調査結果から「初任給（基本給）や夜勤手当などが高いことや、ボーナスの率が高いこと」を選ぶ学生が多いにも関わらず、実際には給料やボーナスが県内で最も高い事業所に集中して就職しているわけではなく、設問3の「家からの距離が近い、通勤時間短い」などの条件に適う事業所のなかで、自分の価値観で「給料や手当が高」と思えるところに就職していく傾向があるだけである。

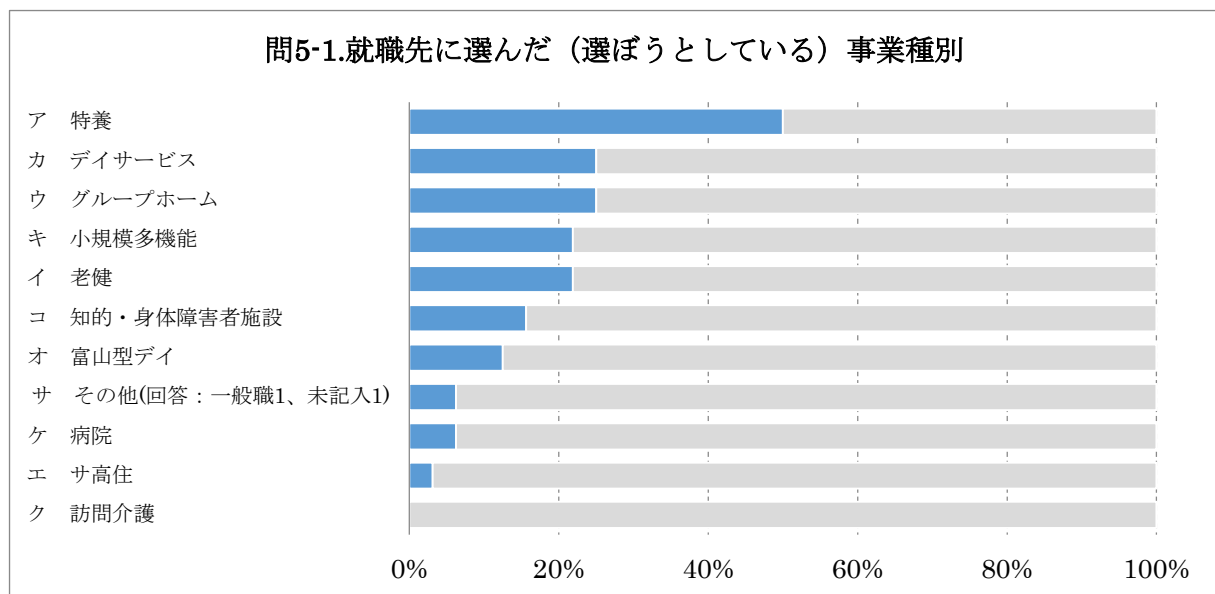
先の「福祉職場説明会での説明」が学生に印象を強く残しているとおおり、「就職直後のサポート体制や新人教育の内容が短期間で終わらず安心できる」といった職場説明会で直接聴いてくることが、結果的に就職先を選ぶ上で大きな要素となることがわかる。

その他では、「事業所の種別へのこだわり（特養、老健、デイ、GH、病院など）」が挙げられる。人気が高いのは特養で、近年は小規模な事業所（グループホームなど）に進む学生

の比率も高まっている。実際に例年の学科の就職動向として、卒業生のおよそ半数は特養に進む一方で、介護老人保健施設（以下、老健）に進む学生はあまりいないという傾向がある。



⑤就職先に選んだ（選ぼうとしている）事業種別



過去の学科での就職実績を裏付けるように、特養がほぼ 5 割という結果である。意外だったのは、小規模事業所であるデイサービスやグループホームのほうが大規模事業所の老健より人気が高いという結果である。これには、要介護度の低いグループホームなどのほうが、特養の利用者と違ってコミュニケーションも取りやすく、介護での負担感も低いことなどが人気の理由として考えられる。また、同じ大規模施設の類である特養と老健では、特養に人気集中し、老健は学生から避けられているとも言える。老健では看護師の下に置かれるのではとの警戒感が学生にあることも推測される。

そして、家庭での家事経験がないことに加え、毎日出かけて、その家の状況やニーズに合

わせたサービス提供が求められる訪問介護は、学生にはまったく選択肢になりえていないことも明らかになった。

たとえ小規模な事業所であっても、富山型デイサービスになると学生からはグループホームと比較して、選ばれにくい状況になっていることもわかった。学生のニーズとしては、多様な利用者が柔軟なプログラムで生活している富山型デイサービスよりも、共同生活が可能なレベルの高齢者だけで暮らす、ルーティンの業務中心のグループホームにあると言える。⑥就職後にチャレンジしたいことやサポートしてほしいこと、さらには就職先に求めたいことや訴えたいことなど

ほぼ、上記の回答結果に順じた内容であった。そういったなかで「過度な期待を寄せないでほしい。プレッシャーになる」「知識はあっても技術が身についていない部分があることを理解してほしい」との回答が目をつけた。実習と就職後の仕事とは、責任の重さが違うことへの意識の現われとも見て取れる。

その一方で、少数ながら「ケアマネや社会福祉士などの資格を取得していきたい」「スキルアップ」など、キャリアアップを志向した回答も見られた。

3 考察

福祉学科 20 期生の進路決定や就職に関する意識の特徴とは、「やさしさの訴求」「余暇の重視」を挙げることができる。

「やさしさを求める」傾向は、学生自身の「自分のレベルで業務についていけるか」や「適性的に自分は向いているだろうか」という不安から発している。そして、職場に対し「職場の人間関係が和やか」で「過度な期待がよせられない」ことを期待している。

また、「あまり忙しくなく、残業もない」「比較的小規模で異動が少ない」ことが期待され、「休みはちゃんともらえるのか」が大きな不安である。そして「家からの距離が近い、通勤時間短い」ことは進路決定の大きな要素となっている。余暇（自分の時間）の確保は思いのほか重視されている。

4 まとめ

福祉学科 20 期生の進路決定や就職に関する意識には以下に挙げる傾向がみられた。

1. 小規模な法人で、かつ異動のない事業所における良好な人間関係が期待されている。
2. 介護業務に就くスキル・適性に不安を持っている。
3. 進路決定には、福祉職場説明会での説明が重視され、実習で受けた指導や職員への印象がそれに次ぐ。
4. 家からの距離が近い、通勤時間短い事業所のなかで、自分の価値観で「給料や手当が高い」と思えるところに就職する。
5. 事業種別では、特別療護老人ホームに次いで、共同生活が可能なレベルの高齢者だけで暮らす、ルーティンの業務中心のグループホームに学生のニーズがある。